

記者が掘り下げる

増刊号

「掩体壕跡」熊本市で確認

旧健軍飛行場にあった飛行機を守る掩体壕の跡が熊本市で確認されました。私が旧制中学の2年生だった終戦直前の1945年、戸島方面で勤労奉仕をした時の壕ではなかったかと思えます。戦争の記憶を残すためにもこうした遺構は大事にしたいですね。

(熊本市、無職・男、87) = 3月2日掲載

残したい戦争の記憶



古閑宏二郎さん方で見つかった旧健軍飛行場の掩体壕跡
= 26日、熊本市東区

戦争体験者の取材でこれまで何度か掩体壕という言葉を見たことがある。飛行機を守る格納庫のようなものらしいが、詳しくは分からない。そこで、投稿者の元公務員小田省二さん(87)に熊本市西区に尋ねてみた。

「最近物忘れが多いが、戦時中の出来事は記憶に残っている」と小田さん。終戦を迎えた1945年夏まで連日連夜、泊まりがけの学徒動員で県内各地に出向き、防空壕造りなどの雑役にあたった。

正確な場所の記憶はないが、掩体壕造りにも携わった。自身は竹林を切り開く任務だったが、仲間が地面を掘って外周に土塁を築く作業を繰り返す光景を覚えている。完成した壕は、草や葉の屋根で全体を覆って空襲から機体を守った。

軍事拠点示す貴重な資料



掩体壕跡を上空から撮影した写真を指差す古閑宏二郎さん。壕に関する証言を集めている

返す光景を覚えている。完成した壕は、草や葉の屋根で全体を覆って空襲から機体を守った。

小田さんは「当時は作業に明け暮れ、何を造っているのか考える余裕もなかった。掩体壕の記事を読み、私の体験を誰かに伝えたかった」と言う。

県内の戦争遺構を調査研究する「くまもと戦争遺跡・文化遺産ネットワーク」によると、掩体壕は太平洋戦争後期に飛行場周辺に分散して造られた。県内で跡地が保存されているのはあさぎり町や玉名市など4カ所に計10基。旧健軍飛行場周辺には残っていない。

熊本市東区戸島本町で見つかった掩体壕跡を、同ネットワークの高谷和生代表(63)と訪ねた。旧健軍飛行場の遺構とされる壕は幅18m、奥行き19m、高さ3mほど。実際に見るととても大きく、陸軍の「飛燕」(幅12m)など小型戦闘機向けだったようだ。

当初は屋根なしとみられていたが、詳しく調べると土塁の近くに縦穴があり、柱を立てて屋根を設置していた可能性もある。高谷さんは「ここまで状態の良い掩体壕は全国的に珍しい。熊本市が軍事的に重要な拠点だったことを示す貴重な資料だ」と驚く。

生まれた長男にもいつか…

掩体壕を初めて間近で見て、その規模の大きさに驚きました。戦争が住民生活のすぐそばにあったことを実感し、戦時中の記憶を子や孫の世代に

継承していかなければならない使命のようなものも感じました。先日生まれた長男にも、いつか掩体壕の話聞かせたいと思います。



政経部 馬場 正広

記者のこぼれ

「ここに掩体壕が造られた経緯やどんな人が関わってきたか、もっと知りたい」と古閑さん。その後も住民の証言を集めて回っているが、遺構の保存には課題も多い。古閑さんは「個人による管理は難しい。このままの形で保存できるか分からない」と悩まされた。

古閑さんと同ネットワークは調査を続ける一方で、近く熊本市に関係記録の保存を求める要望書を提出する予定だ。小田さんは壕の保存とともに、「言葉でつなぐ記憶」の大切さを説く。貴重な遺構と、その記憶を次世代にどう紡いでいくか。関係者の奮闘が続いている。